國學院大學学術情報リポジトリ

宋代訓蒙書と朱熹『小学』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松野, 敏之, Matsuno, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000214

宋代訓蒙書と朱熹『小学』

松野敏之

序

童蒙（童子・小兒・小子）の教育を想定して編纂された訓蒙書としては、『蒙求』『千字文』『三字経』と共に、朱熹（一一三〇～一二〇〇）の『小学』が知られる。古来より童蒙の教育は重視されていたが、宋代になると「文教を興し、武事を抑える」という政策や社会構造の変化、科挙の改革、印刷・出版文化の発展などに伴い、より広範囲の家の子弟たちが教育を受けられるようになり、そのための書籍というものも多く編纂されるこ

ととなった。たとえば、家庭教育において子弟を戒めるために著された家訓・家誡の類は、蘇洵『蘇氏族譜』、葉夢得『石林家訓』、王十朋『家政集』、陸游『放翁家訓』、家頤『教子語』、袁采『袁氏世範』など書目類を見るだけでも数十種以上が確認できる。また、『蒙求』と言えば、唐代中期の李瀚『蒙求』が後世では有名であるが、尤袤『遂初堂書目』や陳振孫『直齋書録解題』には、『三国蒙求』『本朝蒙求』『敘古蒙求』『小説蒙求』『葉才老和蒙求』『西漢蒙求』『十七史蒙求』などが見え、李瀚『蒙求』以外にも多くの『蒙求』が宋代に編纂されていたことがうかがえる。この当時、道学者たちの多くも童蒙のため

の教育書を編纂しており、朱熹『小学』と関わりがあると思われるものだけでも、呂本中『童蒙訓』、司馬光『家範』、呂祖謙『少儀外伝』、劉清之『戒子通録』などがある。

童蒙に何を教えるかということについては、いくつもの観点がある。文字そのものを教えることから、日常生活における戒めや歴史故事などの教養、あるいは大人になってから役に立つと思われる教訓や官途に就いてからの処世訓などもある。朱熹が『小学』を編纂した背景には、そもそも童蒙のうちに学んでおくべき礼楽射御書数や孝悌忠信などの具体的な「事」を知らず、聖賢の学問に努めるための基が確立されていないことを危惧したからである。『小学』全六巻のうち、内篇（巻一―巻四）は経書を始めとする漢以前の書籍から、外篇（巻五・巻六）は漢代以降の書籍から引用されている。外篇（巻五・嘉言、巻六・善行）の出典は多岐に渡り、出典となる書籍は八十種近くにのぼるであろう。しかし、朱熹はすべてを原典から引用したのではなく、ある程度以上は道学者たちが編纂した童蒙書などから転載していると思われる。朱熹は童蒙や初学者に分かりやすいように、余分な文章は刪去して『小学』に収めているのであるが、その刪去の仕方が出典となる書籍よりも司馬光『家範』や呂祖謙『少儀外伝』の方が近いものがある。漢以降

の書籍から引用した外篇の巻五（九十一章）と巻六（八十一章）の全一七二章を確認すると、司馬光『書儀』『家範』から三十章、呂本中『童蒙訓』から二十一章、『少儀外伝』から十八章（『童蒙訓』との重複を含めれば三十一章）、『近思録』から三十八章、また直接朱熹が閲覧した確証はないがおそらく別の形態では参照していたであろう劉清之『戒子通録』からは二十二章（『書儀』『童蒙訓』との重複を含めれば五十六章）を収めていることになる。『戒子通録』を含めた場合、巻五・嘉言、巻六・善行に収める話柄のうち、約八割近くがこれら六冊の書籍から転載引用されたと推測される。『小学』が短期間のうちに編纂されていることから、おそらく朱熹はこれらの書籍を参照しながら『小学』を編纂したと考え得る。逆に言えば、朱熹は当時の訓蒙書を意識しながら『小学』を編纂したのであるう。

以上のことより本稿では、まず宋代の訓蒙書にいかなるものがあつたか、特に朱熹が閲覧した呂本中『童蒙訓』や呂祖謙『少儀外伝』について概観しておきたい。その上で、朱熹がこれらの書籍よりどのような意図で引用・編纂したのか、朱熹『小学』の特徴というものを検討してみたい。

—

宋代の訓蒙書にはどのような書があったであろうか。これは童蒙教育をいかに考えるかということにも通じる。よく用いられていた書としては、やはり『千字文』と『蒙求』が挙げられる。一例ではあるが、趙汝鑑（一一七二～一二四六）は「憩農家」詩（五言古詩）に「群兒窓下に読む／千字文蒙求」と詠み、子供たちが『千字文』『蒙求』を学んでいることをとりあげる。元代になってからではあるが、程端礼（一二七一～一三四五）は『程氏家塾讀書分年日程』巻一において、八歳以前の学習に『性理字訓』を勧め、「此（『性理字訓』）を以て世俗の蒙求・千字文に代ふれば最も佳し」と述べており、このことは元朝下においても『千字文』『蒙求』が基本的な童蒙書として用いられていたということであろう。

『千字文』に類する書としては、伝統的な『急就篇』以外、宋以降になると、誰がいつ編纂したか定かではない『百家姓』や、王応麟（一一二三～一二九六）が編纂したとされる『三字經』などが現れる。童蒙の覚えやすさを重視して韻文の形式を用いたものである。道学者の識字・写字に関する言及はあまり

見られないが、朱熹自身には『訓蒙絶句』の著作がある³⁾。隆興元年（一一六三）頃、児童のために四書を読んで七言一句の形式でまとめたといったものである。この頃、朱熹の長子朱塾は十一歳、次子朱塾は十歳。壮年の朱熹が、韻文形式の童蒙教育とこの取り入れていたことがうかがえる⁴⁾。

『蒙求』に関しては、宋代ではより広範囲な影響がうかがえる。王十朋（一一二二～一一七一）は七歳で亡くなった我が子に『蒙求』と『孝経』を教えていた（『梅溪前集』巻五「哭孟丙」）。『小学』編纂に携わった劉清之（一一三三～一一八九）も、四、五歳の時に李瀚『蒙求』を読み、読書に努めるようになったという逸話がある（『宋名臣言行録』外集巻一四・劉清之静春先生）。その『蒙求』の書自体はどのように見られていたか、一例として朱熹の言を挙げたい。

この時、史学が禁じられていたので、史書を読む者がいなかった。当時、大叔父の朱弁（一〇八五～一一四四）が郷里で教育に携わっており、『蒙求』について一つ一つ話の本末始終を説明し、人々は尊敬して、古今（の歴史）に通じていると賞賛した。

是時既禁史學、更無人敢讀史。時奉使叔祖教授郷里、只

就蒙求逐事開說本末、時人已相尊敬、謂能通古今。(『朱子語類』卷一〇・96条)

周知の通り、『蒙求』は歴史故事をまとめた書であり、宋代當時においても『蒙求』は史書の簡略版のようなものと見られていた。李瀚『蒙求』が漢から晋までの人物を多く収め、隋以後については採録していないこともあり、その欠を補うかのように、宋代には『左氏蒙求』『三國蒙求』『本朝蒙求』『叙古蒙求』『小説蒙求』などが編纂されたのであろう。「左氏蒙求」という書目だけを見ても、楊彦齡『左氏蒙求』(『宋史』卷二〇二・芸文志一)、張洽『左氏蒙求』(『宋史』卷四三〇・道学四・張洽伝)、吳伯秀『左氏蒙求』(戴表元『剡源文集』卷七・左氏蒙求序)の少なくとも三書があり、それぞれすぐに散佚してしまつたようである。その他、胡宏(一一〇五〜一一六一)の『叙古蒙求』、黎晋甫『性理蒙求』、胡炳文(一二五〇〜一三三三)の『純正蒙求』など、おそらく道学・性理学等に基づいて編纂されたと推定される著述もある。しかし、世に流伝し、盛んに類似書が編纂された『蒙求』ではあるが、多くの道学者による『蒙求』評価はさほど高くない。胡宏の『叙古蒙求』に対しては、朱熹は「叙古蒙求は、亦た太多兼はなはだねて奥洪はなはだにして読み難

し、恐らく啓蒙の具に非ず」(『朱文公文集』卷三五「与劉子澄」)と否定的に評価する。そして何よりも李瀚『蒙求』の欠点について、王観国に次のような指摘がある。

唐の李瀚撰『蒙求』は、五百九十八句、一句ごとに一人、一人ごとに一事を述べ、博学の人でなければ、書くことのできないものである。しかし、その欠点は一人に対して二句、三句と設けていることにある。「孔明龍卧」とあるのに、また「葛亮顧廬」や「亮遺巾幘」と述べるのである。……李瀚の意識も、重複を憂えているため、姓名を用いたり、字あざなを用いたり、官職を用いたりして、同じ表現を嫌って言葉を変えようとしている。史書に見える人物は多く、一人で一句とすることは難しくないのに、どうして重複させることがあるのか。またその著すところも、全てが経書・史書から採つておらず、小説・雑書が混ざっている。……小説・雑書は妄誕が多く、信頼できない。李瀚がこれらを経史と同列にするのは、童蒙教育の導入にふさわしくない。

唐李瀚撰蒙求、五百九十八句、毎句著一人、每人著一事、非博學、不能爲此。然其疵在於一人而分作二句或三

句。既曰孔明龍卧、又曰葛亮顧慮、又曰亮遺巾幗。……瀚之意、固患其重複。故或用姓名、或用表字、或用官爵、盖嫌於同、而欲異其語也。夫諸史中所載人姓名事蹟多矣、每用一人爲一句不難也、何至乃重複用之哉。又其所著、不皆出於經史、而間取小説雜書。……蓋小説雜書多妄誕、不可取信。而瀚取此與經史同列、非訓蒙之所先也。(『学林』卷七・李瀚蒙求)

王観国によれば、歴史上に見るべき偉人は多いのに、李瀚『蒙求』は無駄に重複している人物が多く、また経書・史書と同列に小説・雑書の怪しげな書からも引用していることを問題とする。童蒙の教育書としては、一人一事に絞り、確かな出典に基づく話題とすべきことを論じているのである。

二

『千字文』『蒙求』が文字や歴史故事を教える童蒙書とすれば、道学者たちの編纂した童蒙書は人倫を教えることを重視すると言えよう。ここでは朱熹が『小学』編纂に際して特に参照したと思われる呂本中『童蒙訓』と呂祖謙『少儀外伝』についてと

りあげたい。本来なら『小学』の中で最も多くの引用が認められる劉清之『戒子通録』⁶⁾についてまず言及しなければならぬが、『戒子通録』はおそらく『小学』刊行後に成書されている可能性が高く、朱熹が『小学』編纂に際し閲覧しえたか明確に難しい。しかし、劉清之が『小学』の草稿となる書を編纂した際に集めた多くの原稿が『戒子通録』に収められていると考えられる。朱熹『小学』には、明らかに『戒子通録』から引用していると思われる文章が存しているが、劉清之が編纂した『小学』の草稿が伝わらないため具体的なことは明らかにし得ない。

『童蒙訓』三巻は呂本中(二〇八四～一一四五)の著。呂本中は、呂祖謙(一一三七～一一八一)の大伯父にあたる。『四庫全書総目提要』巻九二では「童蒙訓三巻」は「家塾訓課の本」とある。現行本は上中下三巻に分かれ、全体にわたって程顥・程頤・張載・呂希哲・胡瑗・邵雍・徐積等の言行を引用し、学問・立身・読書・師友・仕官に関する文章を採録する。童蒙に教えるを説いたり、戒めを述べたりする形式ではなく、童蒙教育に関わる先賢の善言を引用してまとめられている。おそらくと言うのは、現在伝わる『童蒙訓』は原型書ではないと思

われるからである。朱熹『小学』や呂祖謙『少儀外伝』、劉清之『戒子通録』で『童蒙訓』からの引用としている文章が、現行本には収められていないのである。⁸⁾

さらに、『童蒙訓』には詩話も収めていたことがうかがえる。朱熹が呂祖謙に与えた書簡の中で、「舍人文（呂本中）の著す所の童蒙訓は則ち極めて詩文を論じ、必ず蘇黃（蘇軾・黃庭堅）を以て法と為す」（『朱文公文集』卷三三「答呂伯恭」五）と論じているのである。そして撰者不明『竹莊詩話』には、『童蒙訓』を典故とする詩話に関する文章が十三条収められている。『竹莊詩話』は、宋代に執筆された書と推定されており、おそらくもともと『童蒙訓』には朱熹が見たように詩話に関する話柄が収められていたのであろう。『竹莊詩話』に見える十三条は、古詩十九首・曹植・陸機・孟浩然・李白・蘇軾・黃庭堅・秦觀について言及しており、必ずしも宋人の詩だけを論じたものではない。

もとの書籍がどのような構成であったか定かではないが、詩話に関するものがひとまとまりになっていたとすれば、基本的に『童蒙訓』は宋人の言説を採録した書となるであろう。配列に関して見てみると、全三巻のうち巻上と巻下に学問に関する話題が比較的多く見えるものの、明確な配列基準は把握し難

い。

『童蒙訓』には呂本中が接した北宋の道学者の言を多く収めているため、朱熹は『二程外書』を編纂する際に、『童蒙訓』を参照している。『二程外書』巻一二に「右四条、呂氏童蒙訓に見ゆ」と記して、『二程遺書』に漏れた二程子の語を四条ほど収めているのである。このことからすれば、朱熹が『童蒙訓』を見たのは、『遺書』を編纂した乾道四年（一一六八）以降『外書』を編纂する乾道九年（一一七三）以前のこととなるうか。特に『童蒙訓』に言及する「答范伯崇」八（『朱文公文集』卷三九）が乾道五年の書簡と推定されているため、おそらく乾道四年の『遺書』編纂後、ほどなくして目にしていたのであろう。朱熹自身は『童蒙訓』のことを、「呂氏童蒙訓下巻の数条は、防閑の道甚だ至れり、皆な佩服す可し」（『朱文公文集』卷三九「答范伯崇」八）、「呂氏童蒙訓下巻の守官の法を論ずるも亦た頗る明備、暇日更に試みに之を攷ふるに、当に益有るべし」（同卷四五「答歐陽慶似」二）と評価している。

三

呂祖謙『少儀外伝』¹⁾もまた童蒙教育のために設けられた書で

ある。七十種近くの書籍から先賢の言行を採録し、最初の書名は『師初』、後に『辨志録』と改め、最終的には『礼記』少儀篇から書名を取って『少儀外伝』と定めたと言う（呂祖儉「少儀外伝跋」）。明初には盛んに刊行されたようであり、方孝孺（一三五七～一四〇二）は「其の最も世に益有る者、小学書・近思・辨志二録の若きは、已に大に行はる」（『遜志齋集』卷一二「仕学規範序」）と『小学』『近思録』『辨志録』（『少儀外伝』）の三書が流行していたと述べる。しかし、清朝の頃には『辨志録』は散佚してしまう。たまたま『永樂大典』に文章が欠けることなく収められていたため、上下二巻に分けて復元したのが現在伝わる『少儀外伝』である（『四庫全書総目提要』卷九二「少儀外伝」）。

構成は『童蒙訓』と同じく、先賢の言を引用してまとめた書である。韓琦・呂公著・司馬光・張載・范純仁・呂希哲・程顥・程頤・呂本中から同時代の陸九齡の言も採りあげている。ただし、歴史故事も多く収めており、漢代の馬援・朱勃・江革の話から『三国志』『世説新語』『北史』『南史』『旧唐書』等に見える人物も採りあげている。内容は、学問・洒掃応対などの具体的な礼の細則から人倫・家族・交友・仕官・訓戒などの多岐に亘る。引用した条の末尾には小字注で書名が記されてお

り、冒頭は同時代の宋人の言を引く。卷上・卷下それぞれがおおよそ引用書の時代順で並んでいるが、徹底しているわけではない。

『少儀外伝』がいつ成書されたかは定かでないが、朱熹の淳熙六年（一一七九）の書簡「答呂伯恭」七十（『朱文公文集』卷三四）に、「辨志録は偶たま帶來せず、塾（長子朱塾）をして一本を写さ令めんと欲す」とあることからすれば、これより少し前にまとめたものとなるであろうか。

朱熹はいかに『少儀外伝』を見ていたか。『朱子語類』に一条だけ、『少儀外伝』についての言及がある。

呂伯恭（祖謙）の『少儀外伝』に細々としたことが多いことについて言われた。「人の見るところは同じではない。私は人の大節とはつきりしたところを見ることを好み、このような細々したことについてはざっと眺めるだけにする。ところが伯恭はこのようなところを理解することを好み、その間には「恥を忍ぶ」の説を多く引用し、とりわけ義を損なっている。」

因説伯恭少儀外傳多瑣碎處、曰、人之所見不同。某只愛看人之大體大節、磊磊落落處、這般瑣碎使懶看。伯恭又愛

理會這處、其間多引忍恥之說、最害義。(『朱子語類』卷一 二二・22条)

『少儀外伝』に採りあげる内容が些事にこだわりすぎていて評価するのである。しかし、後述するが、細部において異論はあろうとも、朱熹は『少儀外伝』の発想に基本的には賛同しているのである。

最後に家訓・家誡について簡単にだけ触れておきたい¹²⁾。子弟を戒める家訓や訓戒も童蒙教育の書と位置づけられるが、その内容には学問や道德、処世訓などが多い。系統的にまとめた書としては、司馬光の『書儀』や『家範』がある。『書儀』は、表奏・公文・私書・家書から、冠儀・婚儀・喪儀などいわゆる冠婚葬祭の礼について論じており、『家範』は祖・父・母・子・女・孫など家族道德について論じている。また女兒に対する教育を考えることもあり、朱熹も曹大家(班昭)の『女戒』を司馬光『家範』とともに勧めていることが『朱子語類』に見える(巻七・18条)。

以上、まだまだ遺漏は多いながら、簡単に要約してみたい。宋代、特に朱熹『小学』以前における訓蒙書には、(A)韻文、(B)自述、(C)引用集成の三種の形式があり、学ぶ内容とし

ては、(一)文字、(二)歴史故事、(三)学問の重要性、(四)教訓・訓戒、(五)孝・家族道德、(六)冠婚葬祭の礼、(七)日常の礼、(八)仕官・処世訓、(九)詩文・詩話、(十)女戒などが挙げられる。李瀚『蒙求』などは(A)四言一句の韻文と(C)史書からの引用を併せながら、(二)歴史故事や(三)学問の重要性、(四)教訓、(五)父母への孝などの内容を持つことになる。(B)自述の形式は、家訓や子弟への戒めに多く、『顔子家訓』などがその例である。呂本中『童蒙訓』は家訓という位置づけではあるが、すべて(C)宋代の先賢の引用によってまとめられている。訓蒙書において、(B)自述という形式や注釈体はほとんど採られず、(C)経史の文や先賢の言を引用することによって編纂することが多い。朱熹の『孝経刊誤』があるいは童蒙向けも想定した試みであったかもしれないが、『四書』『小学』ほどには機能しなかった¹³⁾。

四

淳熙二年(一一七五)、朱熹は呂祖謙と共に『近思録』を編纂。長子朱塾を呂祖謙に従学させており、二人の間では童蒙教育ということも話題にのぼっていたのである。童蒙教育のた

めの書としてまず呂祖謙が『少儀外伝』（『辨志録』）を編纂。成書時期は定かでないが、朱熹が朱塾に『辨志録』を写してくよう命じているのが淳熙六年（一一七九）のことであり、それより少し前頃に成書したか。淳熙八年（一一八一）、呂祖謙が亡くなる。この頃、劉清之とも童蒙教育について話題としていたようであり、淳熙一〇年（一一八三）の書簡で『小学書』を整理したかどうか尋ね、劉清之に「嘉言」「善行」を付け足すことを勧めている。そしておそらく淳熙一一年の秋冬頃に劉清之の『小学書』が朱熹のもとに送られ、朱熹は半年の間に『小学書』を自分の方針で編纂しなおし、古今の故事を増補して全六篇とした。「小学書題」を執筆するのは淳熙一四年（一一八七）であるが、その前年淳熙一三年には『孝経刊誤』を成書している。

朱熹の方針で『小学』が改訂されていることの一例として、引用された『孝経』の文章が挙げられる。緒方賢一氏は、『孝経刊誤』と『小学』所収『孝経』との比較から、『小学』に収める『孝経』の文章は、朱熹が『孝経刊誤』で経文とした文章を引用していることを指摘する¹⁵⁾。氏の指摘通り、『孝経刊誤』と『小学』の編纂は関連するものであろう。

また淳熙一〇年（一一八三）の段階で劉清之に「嘉言」「善

行」を付け足すよう促しているが、これにはおそらく呂祖謙『少儀外伝』が影響している。『少儀外伝』には、宋代の道学者の言説と史書に見える歴史上の人物の言行が混在し、朱熹『小学』と話柄の取め方が類似している。「四庫全書総目提要」巻九二・少儀外伝でも、「此の書は則ち旧文を採輯し、体例は朱子小学に近し」と述べている。呂本中『童蒙訓』も先賢の言説を引用しているという点においては同じであるが、宋人の言説だけを対象としていた。それに対し、呂祖謙『少儀外伝』は宋人のみならず、歴史上の人物の「嘉言懿行」を収めているのである。

朱熹は『小学』編纂に際して、かつて『訓蒙絶句』を作ったように韻文という形式は用いず、また『蒙求』のように要点を四言で提示するということもしなかった。経書・史書と先賢の言行を引用することによってまとめたのである。これだけなら他の訓蒙書とも大きく変わるものではないのであるが、朱熹『小学』の特徴は、経書を始めとする漢以前の文章を内篇（巻一～巻四）に、漢以後から同時代の宋までの文章を外篇（巻五・巻六）に分類して収めたことである。配列の核は「立教」「明倫」「敬身」の三つで、それぞれが巻一・立教、巻二・明倫、巻三・敬身に配され、巻四で漢以前の文献から立教・明倫・敬

身の参考となる言行を、巻五では漢以後の文献から立教・明倫・敬身に関わる嘉言を、巻六も同様に立教・明倫・敬身に関わる善行をまとめた。「立教」「明倫」「敬身」を分け、「明倫」ではさらに五倫を分類し、それぞれに文章を配したのである。無論、王観国が李瀚『蒙求』を批判したような、小説・雑書から引用することはない。司馬光『書儀』や『家範』のように限定的な範囲において系統立てられた書はあるが、『小学』以前の訓蒙書は雑駁な印象が強く、『小学』の構成の良さは際立っていると言えよう。分類のみならず、収められている話柄もある程度、バランスがとれている。『小学』外篇の嘉言第五・善行第六に引用された文章の数を列挙すると次のようになる。

嘉言第五 (全91章)	善行第六 (全81章)
広立教 14章	実立教 8章
広明倫 41章	実明倫 45章
父子 (14章)	父子 (10章)
君臣 (10章)	君臣 (8章)
夫婦 (8章)	夫婦 (5章)
兄弟 (4章)	兄弟 (10章)
朋友 (3章)	朋友 (1章)

通論 (2章)	通論 (11章)
広敬身 36章	実敬身 28章

童蒙の教育を前提とした『小学』ではあるが、五倫全てに言及するが故に「父子」においては喪礼に関する話題も収めている。「広明倫」の「父子」では十四章のうち四章が、「実明倫」の「父子」では十章のうち二章が喪礼に関する話題となっている。なお、呂本中『童蒙訓』は葬礼・祭祀に関する話題を収めないが、『少儀外伝』では「葬なる者は人生の大事」から始まる司馬光『家範』巻五の文章を引用している。いわゆる学問を奨励したり処世訓を述べたりする童蒙書と、『小学』『少儀外伝』が想定しているものは異なると言えよう。童蒙が学ぶべきこととして、学問や身の敬み方と共に、人にとって最も大切な五倫を総合的に把握することを重視するのである。

五

朱熹は自身の見解に基づいて『小学』に収める話柄を選択している。当然と言えば当然のことではあるが、たとえば馬援の戒めを『小学』に収めたことについて、林易簡から「馬援は譏

議を以て諸子を戒むるも、譏議を免れず」と指摘された。これに対して朱熹は「馬援の言は自ら法と為す可し。須らく此かの如く支蔓なるべからず。此くの如くんば則ち須らく此の段を削去すべきも、後生又た如何ぞ此の一段の説話を聞きて以て戒めと為すを得んや」(『朱文公文集』卷六四・答□易簡)と、馬援の戒めに代わるような説話のないことを強調する。馬援のような戒めは、ここにしか見えないと説明するのである。

また、朱熹は呂本中『童蒙訓』下卷の「防閑」(警戒・省察)「守官」に関する数条を評価するが、「小学」にはこれらの条を取めていない。『小学』は『童蒙訓』から十七章を引用しているが、それらのほとんどは『童蒙訓』上巻からの引用であり、下巻からは採っていない。これには『小学』に関する見解が関係しているかもしれない。「小学は那の恭敬の処を説くこと多く、那の防禁の処を説くこと少なし」(『朱子語類』卷一〇五・21条)と述べていることからすれば、意図的に「するな」という禁止系の話題を抑えている可能性がある。『小学』に設けた「敬身」を想定すると、「敬」に努めるためには禁止事項を多々設けるよりも、こうすべきであるということを示した方がよい。ある対象に対して意識を集中し、専心して取り組むことを奨励するためとも言える。

さらに「敬」と共に、「小学」で朱熹が重視するのは「孝」である。仁・理・性などを前面に打ち出したことにより、朱熹等道学者における孝の位置づけは、従来と比較した場合、相対的に低いとされる。¹⁶⁾朱熹は「孝」をあらゆる道徳の根本としてではなく、仁への端緒と位置づけ、また「仁は是れ理、孝弟は是れ事」(『朱子語類』卷二〇・79条)、「仁は是れ理の心に在るなり、孝弟は是れ心の事に見はるるなり」(語類卷二〇・126条)とあるように、孝弟は具体的な「事」であり、父母という対象に対して表れた「用」となる。朱熹にとつて、「小学」の編纂が重要だったのは「四書」など大学で学ぶべき「事の理」の「事」を小学の段階において獲得しておくことである。「小学とは、其の事を学ぶ。大学とは、其の小学の学ぶ所の事の所以を学ぶ」(『朱子語類』卷七・6条)という至極当たり前のことも、学ぶべき「事」を見失つては何もものにならない。『小学』はこの「事」を提示する試みであり、孝はそのなかの一つに過ぎないこととなる。立教・明倫・敬身、特に明倫(五倫)の話題を孝に特化させることなく、調和を保ちながらまとめたことによつて、「孝」はあくまで明倫(五倫)の一つとなり、また小学で学ぶべき「事」の一つとなる。「孝」は人倫の最も重要なものではあるが、それ以上の重みを持たせることなく、五倫

の実践道徳の一つに位置づけられていく。言い方を換えれば、ある一つの関係性に特化させるのではなく、様々な関係性の中に自分があり、それぞれの立場から倫理に努めるべきことが強調されているとも言えよう。

また、全体的な配置もさることながら、具体的な話題についても朱熹は調和を保ちながら取捨選択している。試みに善行第六の「明倫」の「父子」に関する十章を採りあげてみたい。これら十章における孝の対象を列挙すれば、父（15章）、母（9・17章）、父母（13章）、父と継母（10・11章）、亡父（12章）、亡母（16章）、亡父・亡母（18章）、姑（14章）となる。孝養を尽くす状況も、自宅で恭勤に事える以外に、兵乱・貧窮（9章）、家を追い出されながら、日々父母のもとに通う（10章）、父の非命の死を痛み、父の墓側に暮らす（12章）、遠方にいる父の急病を察知（15章）、幼い頃、父に追い出された母を六十歳にして探し出す（17章）など多岐に渡る。朱熹が参看した童蒙書を概観するだけでも、もっと多くの孝に関する善行を集めることは出来たであろうが、敢えてしなかつたと言えよう。また「孝」に過度な重みを持たせるような話柄、たとえば孝によって天地自然や動植物が動かされるといような話柄も基本的には収めない。ただ一章だけ例外がある。先に『小学』

は朱熹の見解に基づいて話柄を選択したと述べたが、王祥の話だけは朱熹の見解に合致するものかどうか危うく、最後にこのことを検討しておきたい。

六

『小学』善行卷六の11章には、王祥の話を収める。『蒙求』にも採られている有名な逸話である。嚴寒の折、生魚が食べたいという母の願いを叶えようと、王祥が氷を割って水中に入ろうとしたところ、鯉が飛び出てきたというものである。『小学』では鯉が飛び出すところだけでなく、王祥が継母に譏られ、父の愛を失いながらも、よく父母に恭勤に事え、看病したという話が前半を占め、後半に「臥水求鯉」の話を収める。

この王祥のいわゆる「孝感」（孝に感じて水下より鯉が出てくる）の話柄には程頤も注目しており、「孝弟の至は、神明に通ず。神明・孝弟は是れ両般の事ならず。只だ孝弟は便ち是れ神明の理。又た問ふ、王祥孝感の事は、是れ神明に通ずるや否や、と。曰く、此れも亦た是れ神明に通ずるの一事なり。此れ感格は便ち是れ王祥の誠中より来る、王祥の此に孝にして物の彼より来るに非ざるなり」(『二程遺書』卷一八)と論じている。

『孝経』の「孝弟の至は、神明に通ず」と王祥孝感の話柄を結びつけるのであるが、朱熹はそもそも『孝経刊誤』編纂において、程頤の言う『孝経』の一文を経文ではなく、伝文に位置づけている。王祥の話は、「孝」に人倫以上の過度な重みを持たせかねないものがあり、朱熹にとっては受け入れ難いもののように感じられる。

同じく善行第六には15章に庾黔婁の話を取めている。病いの重い父のため、「夕に至れば毎に北辰に稽顙し、身を以て代はらんことを求む」と禱りを捧げた。『梁書』卷四七、『南史』卷五〇ではこの禱りの後に、「俄かに空中に声有るを聞く」と続いて、庾黔婁の「誠禱」が天に届いていることが語られていくのであるが、朱熹はこの後半を『小学』には収めない。父のため熱心に禱ったというところで、15章は終わっているのである。庾黔婁のように王祥の話も後半を刪去するということはせず、「臥氷求鯉」の話を取めたのはなぜか。朱熹は王祥孝感をどのように考えていたのか。『朱子語類』中には二条の間答が記録されている。

鄭可学「王祥孝感の事は、伊川はどのように説いているのでしようか。」

朱子「程先生は多くこのようなどころがあり、物我一同を説こうとしている。しかし孝は王祥であり、魚は水中の生物であり、分けざるを得ない。もし感應を説くならば、ただ己れが感じると言うだけで、物も感應したと言うべきではない。」

問、王祥孝感事、伊川説如何。曰、程先生多有此處、是要説物我一同。然孝是王祥、魚是水中物、不可不別。如説感應、亦只言己感、不須言物。（『朱子語類』卷九七・92条）

王祥の孝感は、ただ誠がこちらで発し、物（魚）がこちらで感應したもの、あるいは内に感じたと考えたり、誠よりするものと考えたりするが、いずれもそうではない。王祥はもとより王祥であり、魚ももとより魚である。今人は理を論じるのに、渾然とした境地を包み合わせるようにしてしまう。二つは全くの別物であるとはいえ、無理矢理混淆させて説いても、そうだとはいえない。世間の事は千差万別であるとはいえ、その実はただ一つの道理であり、これを「理一分殊」と言う。感通に至れば、自然と首尾一貫し、こちらから発して外のものが感じたり、外から来て私を感じたりすることも、すべては一理なのである。

王祥孝感、只是誠發於此、物感於彼。或以爲內感、或以爲自誠中來、皆不然。王祥自是王祥、魚自是魚。今人論理、只要包含一箇渾淪底意思、雖是直截兩物、亦強衰合說、正不必如此。世間事雖千頭萬緒、其實只一箇道理、理一分殊之謂也。到感通處、自然首尾相應。或自此發出而感於外、或自外來而感於我、皆一理也。(『朱子語類』卷一三六・35条)

朱熹は文章そのままに、王祥の孝に感応して魚が現われたとは解釈しない。『語類』での問答からすれば、朱熹が注目するのは、王祥の孝と魚とは別々のものでありながらそこに通底する理があるかもしれないこと、それが理一分殊を考究する端緒になるということである。呂祖謙などはそもそも王祥について言及しないのであるが、朱熹は王祥の話を『小学』善行の孝に採りあげた。「孝感」に関する話題が多いが故に、有名な王祥を採りあげただけかもしれないが、いずれにしろ孝感という事象を肯定的に強調するためではないであろう。受け入れがたいことでもすぐに切り捨てるのではなく、しばらく措いておのずと理解がゆきわたるのを待つ、という朱熹の姿勢に起因するところともかもしれないが、王祥孝感の話を『小学』に収めたことは、

結果的に『小学』が提示する孝の「事」の幅を広げることになった。

結

後世、朱子学の普及に伴って、まず朱熹『小学』を目にするが故に、『小学』のような配列を当たり前の定式と感じてしまうかもしれない。しかし、当時においてはおそらく呂祖謙『少儀外伝』のような引用した書目ごとにとまとめるという形式が主流であったであろう。劉清之の『戒子通録』も引用書目ごとのまとめとなっている。童蒙の教育を想定した書籍において、朱熹『小学』が五倫すべてを包括して分類したことは、当時において異例の体裁であり、だからこそまた人々の目に新鮮に映ったかもしれない。

『小学』の書はそれ単体で完結するものではない。あくまで大学の学のための基を学ぶための書である。洒掃應對進退などの礼の細則については、『小学』内篇に収めた経書から学び、反復習慣化して培うことが重視されるが、それらを補うことになる外篇の嘉言・善行の話柄も重要になってくる。朱熹が閲覽した書籍からすれば、もっと多くの話柄を収めることも容易

だったであろうが、立教・明倫（父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友）・敬身に亘るものを調和を保ちながら収めることを優先したと考え得る。後学の士たちが『小学』を読んでまず感じるのは、「孝」と「敬」の提示であるが、それも大学の学（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）との連携で考える必要がある。『小学』が提示する孝はあくまで五倫の一つ、小学で学ぶべき「事」の一つであり、大学の学においてその「事の理」を探求してこそ意味を持つ。孝は仁（理）に至るための端緒であり、また仁（理）の用なのである。朱熹の見解にはそぐわないであろう王祥孝感の話柄も、あるいは『小学』で提示しておくべき「事」と判断して収録した可能性もある。いずれにせよ、『小学』が提示するのは、格物や敬の対象となるべき「事」であり、童蒙向けの書籍だからといって学問の幅を狭めるようなことはしない。むしろ様々な関係性の中で道理を考え、実践するための素地が示されている。朱熹は童蒙向けだからといって妥協することなく、大学の学と同じ範囲で小学の学を提示したのである。だからこそ大人になってからも『小学』は学ぶのに足る書として扱われていくのであろう。

南宋末以降、『小学』は『四書』と共に盛行していくが、その背景には、書籍としての適切な分量という事情もあったかも

しれない。宋末元初の戴表元（一二四四～一三一〇）は、朱熹の著作の状況について次のように述べている。

甲辰・乙巳の頃（淳祐四年・五年）になると、朱子の説を用いて甲科となる者が現れた。天下四方はにわかにな争つて朱子学を求めようになり、我が郷里（慶元奉化）は遠い片田舎であったため、ようやく朱子の著書を手に入れることができた。大抵、朱子の著書は『周易本義』『四書集註』『小学』が完本となっていたが、それ以外は脱稿していなかったり、他者の文が紛れていたりして完全な一冊の書とはなっていないかった。

及甲辰乙巳間、有用其說取甲科者。四方翕然爭售朱學、而吾鄉以遠僻、方獲盡見徽文公所著書。大抵諸書、惟易本義、四書註、小學書、最爲完備。其餘或未經脫棄、或雜出他手非全書也。（『剡源文集』卷七・于景龍註朱氏小学書序）

淳祐四年～五年（一二四四～四五）以降に一回っていた朱熹の完本は『周易本義』『四書集注』『小学』だったという。これには無論、内容的な関心の高さが大前提となるが、一書として

適切な分量だったということもある。朱熹の著作であつても大部の書は遺漏激しく、ひどい場合は関係のない文章まで入り込んでいたと言う。この問題は印刷技術の発展と共に解消されるが、南宋のある地域においてはこのような事情もあつたということがある。そしてこの南宋末以降、『小学』は盛んに刊行され、童蒙のみならず士人や郷里の人々が学んでいくこととなる。

注

- (1) 『小学』については、劉清之が編集したことを重視する見解もあるが、現在伝わる『小学』は朱熹の編纂方針に基づいて著された書である。拙稿「朱熹『小学』編纂考——劉清之小学書からの改修に關して——」、『論叢アジアの文化と思想』二三号（二〇〇四年二月）参照。
- (2) 『百家姓』がいつからあるかは分からないが、陸游（一一二五—一二一〇）の頃にはあつたと推定されている。陸游「秋日郊居」詩（『劍南詩稿』卷二五所収）に「兒童冬學閨比鄰、據案愚儒却自珍、授罷村書閉門睡、終年不著面看人」とあり、その自注に「所讀雜字百家姓之類、謂之村書」と見えるからである。
- (3) 訓蒙絶句は朱熹の作でないという疑いもあるが、東景南氏は朱熹の作として、隆興元年（一一六三）に成書したと推定する。『朱熹年譜長編』卷上（華東師範大学出版社、二〇〇一年九月、315頁）。また、熊瑜「朱熹家庭教育簡論」『四川大学学报（哲学社会科学版）』二〇〇二

年五期参照。

- (4) 朱熹より後の時代であるが、元の呉澄は「千字文」「蒙求」のような説誦を優先したものを批判する。呉澄「虞舜民禮學韻語序」（『呉文正集』卷一七）。「性理大全書」卷四三「小学」にも収録。
- (5) 書名に「蒙求」とは冠さないが、黄齊賢「通鑑韻語」のように李瀚「蒙求」の四言体に倣って著した史書もある。趙希弁「郡齋讀書志」卷五上・小学類に「通鑑韻語九卷 右黃日新齊賢所著也。大略如李瀚蒙求四言體、而列其事於左方」とある。
- (6) 『戒子通録』については、沈時春「論劉清之和他的《戒子通録》」『四川師範大学学报（社会科学版）』二二卷二期（一九九五年四月）、緒方賢一「『編集』という名の思想——劉清之の『戒子通録』をめぐって」『立命館言語文化研究』二二卷三号（二〇一〇年一月）（後）、中国近世士大夫の日常倫理」中国文庫、二〇一四年三月所収 参照。緒方氏の指摘によれば、「与劉子澄」一四（『朱文公文集』卷三五）の書簡に基づき、朱熹が『戒子通録』を見たのは『小学』成書の二年後、淳熙一五（一一八八）のことと推測される。
- (7) 『戒子通録』卷三「曾子告子言」には、『大戴礼記』『說苑』から曾子の語を三章として収める。『小学』では、その三章うち第二・三章を明倫103章・104章に収める。『大戴礼記』『說苑』からの引用の仕方や配列順から、劉清之が抜粋収録した三章を、朱熹が第一章だけ削ったと考えるのが妥当であろう。拙稿前掲論文参照。
- (8) 粟品孝「呂本中《官箴》」出自『童蒙訓』原本考』『文獻』二〇〇七年四期（二〇〇七年一〇月）は、現在『官箴』として伝わる呂本中の書は『童蒙訓』の一部であつたと推定している。
- (9) 『程外書』と同年に成書した『伊洛淵源録』巻一にも、「呂本中作童蒙訓曰」として『童蒙訓』の文章が引用されている。
- (10) 陳来「朱子書信編年考証」三聯書店、二〇〇七年九月）参照。以下、

朱熹の書簡の年代についてはすべて陳来『朱子書信編年考証』を参照。

(11) 『少儀外伝』については、王曉薇・李鵬「呂祖謙『少儀外傳』中の童蒙教育思想」『中国史研究』八八輯（二〇一四年二月）を参照。

(12) 宋代の家訓については、緒方氏前掲書参照。

(13) 加地伸行氏は『孝経刊誤』を『大学章句』の実験作と位置づける。『孝研究 儒教基礎論（加地伸行著作集Ⅲ）』（研文出版、二〇一〇年一〇月）参照。

(14) 朱熹と劉清之の『小学』編纂に関するやりとりについては、拙稿前掲論文参照。

(15) 緒方賢一「『孝経刊誤』と朱子」『集刊東洋学』八一号（一九九九年五月）。後、前掲書所収。氏は『孝経刊誤』や『小学』は「家」の崩壊を危惧し、「齊家」を語るテキストとして編纂されたと考察する。

(16) 緒方前掲論文参照。

(17) 庾黔婁の話については、陳淳からも疑義を呈されている。『朱文公文集』卷五七「答陳安卿」二。